

若年層の住宅像に関する研究

—女子大生の住宅像調査—

碓田 智子, 住田 昌二, 金岡 トモコ*

(大阪市立大学生活科学部, * 富山女子短期大学)

平成元年5月2日受理

A Study on the National Housing Ideal of the Present-Day Young Adults

—Survey for the Women College Students—

Tomoko USUDA, Shouji SUMITA and Tomoko KANAOKA*

Faculty of Science of Living, Osaka City University, Sumiyoshi-ku, Osaka 558

* Toyama Women's Junior College, Toyama 930-01

The purpose of this study is to make clear the outline about a housing ideal that the present-day young adults imagine in relation to their housing careers and life-styles. In this survey, women college students who live in Tokyo, Osaka, Toyama and Ehime Prefectures were inquired (about 200 samples per one region). Most of them were born or have been grown up in the owner-occupied houses of middle class.

The results are as follows.

1) It is often said that the present-day young adults are free from traditions and established values, but in our survey they were acknowledged to be rather conservative as a whole.

2) On the assumption that they have grown up in the owner-occupied houses, most of the young adults have an ideal of owner-occupied detached house with its own yard under their sub-consciousness and they have much stronger image than that the older generations (housewives) have.

3) A housing ideal of the young adults relates in its background to their housing careers, conservative ways of thinking and the Japanese identity.

4) An ideal of the owner-occupied detached house with its own yard is also reproduced by the present-day young adults who have grown up in the owner-occupied houses.

(Received May 2, 1989)

Keywords: housing ideal 住宅像, young adults 若年層, owner-occupied detached house 戸建持家, housing career 居住歴.

1. 緒 論

(1) 研究の背景

本研究は、ある時代に国民が共通してもつ住宅の理想像を国民住宅像とすると、現代における日本人の住宅像を地域的、階層的、世代的に洗いだし、その過程で日本人の多くがもっているといわれる「庭付き戸建持家」の理想像がどの程度普遍的に浸透しているかを検証することによって、21世紀に向かう状況下での、国民住宅像の輪郭を描出しようとするものである。

ところで、戦前から現代に至る住宅像の推移の概略を

たどってみると、まず、少なくとも戦前は、農家や町家、長屋住宅といった「木造りの家」が、国民住宅像として一つの系譜をなしていたと考えられる。ところが、戦後の復興期には、戦災や震災で木造住宅が大きな被害を受けたことが影響し、不燃化住宅、鉄筋コンクリートの住宅が国民住宅像として浮上した。昭和30年代に入ってから、公営・公団住宅が、RC造の集合住宅を採用したこともあって、「団地族」が羨望されたように、都市のホワイトカラー層にとって、RC造の集合住宅が一つの住宅像となる。昭和40年代になると、郊外の庭付

き戸建持家の理想像が都市サラリーマン層を中心に形成されていき、高度経済成長期のインフレ、地価や建設費の高騰により、経済的有利性からも持家志向は高まっていった。住宅の様式については、従来の洋風住宅に加え、プレハブ住宅の台頭とともに欧米スタイルのファッションな住宅も現れる。そして、住宅の洋風化が進む一方で、近年に入っては、住宅に格式性や象徴性を求める傾向、木の文化の再認識から、再び木造り・和風の住宅が見直されているようである¹⁾²⁾。

このように、戦後40年間に、都市化の進行、住宅生産技術の向上、生活様式や家族形態の変化など、住宅を取り巻く状況が激変し、国民住宅像も大きく揺らぎ、多様化した。そして、住宅選択の場がますます広がり、選択肢が豊富になった今日、「持家-借家」、「戸建-集合建」、「木造-コンクリート造」、「和風-洋風」など、対立する概念が並列するなかで、国民住宅像は混沌とした状態にあると考えられる。今後、都市化のいっそうの進行や都市住宅生産技術の向上に加えて、ライフスタイルの多様化、家族の小規模化などが、住宅像の多様化をさらに促していくことが予想される。しかしその一方で、各種の世論調査結果³⁾が示すように、全体としては「庭付き戸建持家」を理想とする住宅像が、現代日本人に根強く浸透しているともみられ、それが日本人の国民性とも相まって、どのように形成されているのかが注目される。

本研究は、上述の主旨のもとに、住宅像を住宅に対する共通の価値観と定義する。そして、時代的な推移を背景に、個人の価値観ではなく、一つの社会集団に共有される意識を対象とする意味で、時代意識・社会意識としての視点から現代の国民住宅像を抽出し、住宅像定立の可能性を検討する点を特徴としている³⁾。

(2) 本稿の目的

高度経済成長期に生まれ、生活様式やライフスタイルの激しい変化のなかで成長した現在の若者は、伝統的な価値観から無縁な世代であり、個性的で多様な感性をもつといわれる。そして、しばしば若者が新人類とよばれるように、価値観や生活スタイルにおける、世代間のギャップが大きくなっていると考えられる。こういった傾向は、近年の、現代青年の生活志向に関する調査⁴⁾などからもうかがえる。

一方、統計数理研究所の第VI次国民性調査⁵⁾によれば、日本人の考え方は、新しい時代に育った人の参入によって変化していくが、人の意見は年をとってもそれは

ど変化しない傾向が現れている。現代の若者の考え方にもこういった傾向があるなら、次代の中心となる若者がどのような住宅の理想像を描いているか、また、それを現代の若者に共通する社会意識として定立できるかを検討することによって、21世紀における国民住宅像の方向を描出する上での示唆が得られると考えられる。

本稿では、多様な生活感覚をもつといわれる若年層が、潜在的にどのような住宅の理想像を抱いているかを、地域差、居住歴、ライフスタイルなどの視点から検討していく。その過程で、若年層においても、戸建持家の理想像がどの程度浸透しているかを明らかにし、現代の若者像と住宅像のかかわりを考察する。さらに、主婦層を対象に行った予備調査⁶⁾の結果と比較して、住宅像の世代差についても論考する。なお、本稿における若年層とは、調査対象とした女子大生を意味している。

2. 研究の方法

(1) 研究の枠組

ここでは、若年層が共通してもつ住宅に対する価値観を狭義の住宅像と定義し、これを、①所有形態、建て方、立地などを総合した住宅に対するイメージ、②将来の住宅選好、③外観とインテリアの選好、の三つの側面からとらえるものとする。そして、若年層の住宅像が、社会・経済の動向を背景に、客観的要因と主観的要因の2側面によって規定されると仮定し、前者には基本層性に加えて、居住地域、居住経験、後者にはライフスタイル、日本人のアイデンティティ意識、結婚・職業観をとりあげ、図1に示すような調査の枠組を設定した。なお、①の設問項目は、住宅に関する各種世論調査⁷⁾を参考に構成している。本稿では、①、②の分析を中心に、住宅の外観選好も加味して、若年層の住宅像を検討していく。

(2) 調査方法

1) 調査対象者

多様な生活感覚をもつといわれる現代の若者の、潜在

*2 近年、大阪都市圏の典型的な戸建持家やマンションを取得した世帯の主婦を対象に、住宅に対する考え方や生活意識に関するアンケート調査を行った(戸建層156戸、マンション層173戸)。対象の主婦層は、40歳前後の中年層が中心で、大学・短大卒が約4割である。分析の結果、戸建層では2/3近くに「木造り・戸建持家」の住宅像が浸透していること、一方、マンション層では集合住宅を理想とする意識は共通するものの、「持家」、「借家」については価値観が二分し、住宅像の分裂傾向があることが認められた(調査期間：昭和63年9月13日～10月13日)⁸⁾。

*1 近年の世論調査では文献3)、4)などがある。

若年層の住宅像に関する研究

的な住宅の理想像を描出することをねらって、流行や情報感覚に敏感な年頃であること、また主婦層との比較という点から、女子大生を対象とした。とくに地域差に着目して、大都市圏では東京と大阪、地方圏では、積雪地域で持家率・平均住宅規模が全国最大の富山と温暖地域の愛媛の計4地域を選び、4大学の学生（各地域約200名ずつ）を調査した。対象の学生は、家政系専攻の1年生と2年生が中心である。

2) 調査期間

昭和62年10月～11月中旬

3) 調査方法

集団法によるアンケート調査

4) 調査内容

図1に示す。外観選好については、24種の戸建住宅外観のカラー写真シートを用いた。

5) 回収状況

表1に示すとおり。

なお、分析は大阪市立大学計算機センターにて、社会統計パッケージ SPSS-x¹⁰⁾を用いて行った。以下では、4地域を〈東京〉、〈大阪〉、〈富山〉、〈愛媛〉と称す。

3. 結果と考察

(1) 調査対象者の属性とライフスタイル

1) 基本属性の概要

① 出身地：全体の7割強が自宅通学者である。〈愛媛〉と〈東京〉には自宅外通学者も多いが、出身地はほとんどが大学と同都府県、あるいは隣接都府県であることから、出身地と地域とは、ほぼ一致するとみなした。

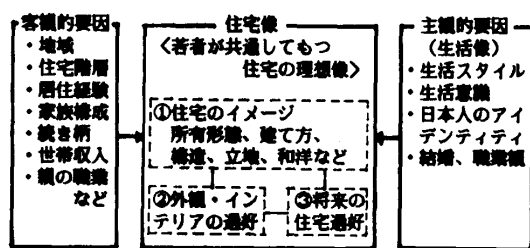


図1. 調査の内容と枠組

表1. 回収状況

東京 (S女子大)	200
大阪 (S女子大)	208
富山 (T女子短大)	190
愛媛 (E大)	197
合計	795

② 家族型：核家族66%、世代家族27%である。〈富山〉では世代家族が多いことが特色である（約40%）。

③ 世帯収入：平均収入は722万円とかなり高い。〈大阪〉は平均925万円、1,000万円以上が3割近くあり、〈愛媛〉は500万円未満が6割近くを占める。

④ 親の職業：父親の職業は、サラリーマン65%（部課長以上が多い）、ついで自営業17%である。〈愛媛〉では、農業が10%程度を占める。また、〈富山〉と〈愛媛〉では、共働き世帯が多い（80%、60%）。

(2) 住宅階層と居住歴

1) 住宅階層

今回の調査対象者の自宅は、9割が1戸建持家で、マンション3.8%、借家6.2%である。〈東京〉では、マンション層や借家層の比率がやや高い。〈富山〉は平均層数63.4層で最も住宅規模が大きく、〈愛媛〉は部屋数、層数とも最小である。

2) 居住経験

表2は、現住宅を含めて、これまでに居住経験がある住宅タイプを類型化して表したものである。「戸建持家のみ（農家以外）」が全体の4割弱を占め、とくに〈富山〉と〈大阪〉に多いことが目立つ。〈富山〉と〈愛媛〉には「農家住宅居住経験あり」が、また、〈東京〉と〈大阪〉には「戸建持家に居住経験なし」が一定数みられる。〈愛媛〉と〈東京〉で、「戸建とアパート」の比率が高いのは、自宅外通学者の下宿などを含むためである。

以上の諸点から、本稿では、調査対象者の大部分が戸建持家層で、社会的にも比較的上層家庭の子女が多いという特性を前提として、検討をすすめる。なお、以下の分析でクロス集計については、クラマー係数および χ^2 値による検定を行っている。

(3) 若年層の生活像

感性に優れ、新しい生活価値観をもつといわれる現代の若者のライフスタイルは、住宅像にも多分に影響を与えていると考えられる。ここでは、住宅像に影響を及ぼす主観的要因として、女子大生の生活像を、日常生活スタイル、生活価値観、日本人のアイデンティティ、将来生活の動向とも関連する結婚・職業観、の四つの側面から把握・検討する。

1) 生活スタイル

生活様式や休日の過ごし方などに関する日常生活行動19項目について、回答が明確に現れるように、「はい（1点）」と「いいえ（-1点）」の二者択一で回答してもらった。全体では、「デパート、繁華街などにしばしば出かける」、「食事のスタイルはテーブルにイス」、「休日

表 2. 居住経験 (%)

	東京	大阪	富山	愛媛	合計
農家居住経験あり	1.5	7.3	27.3	20.7	14.0 (111)
戸建持家のみ(農家以外)	30.5	50.5	48.9	18.8	37.2 (296)
戸建とマンションほか	9.5	4.8	0.0	6.6	5.3 (42)
戸建とアパートほか	48.0	28.4	21.1	50.8	37.1 (295)
戸建持家居住経験なし	10.5	9.1	2.6	3.0	6.3 (51)

現住宅を含む。()内:人数

は、繁華街で過ごす、「ベッドで寝ている」など、都会的な行動や洋風の起居様式に関する項目について肯定率が高い傾向がある(60~70%)。

うち、表3に示した16項目について因子分析を行うと、「洋風の生活様式」と「家庭的な行動」を示すと解釈できる二つの軸が抽出された。ここで「洋風」とは、起居様式の点からいうものであり、洋風軸にマイナスの因子得点を示す場合を「和風」とよぶものとする。また、「家庭的」とは、趣味の料理や手芸、家事手伝い、習いごとをするなどの行動をいい、家庭軸にプラスの因子得点を示す場合を「家的」、マイナスの場合(休日は繁華街で過ごすなど都会的な項目にはプラスを示す)を「街的」とする。この二つの軸を直交座標とする4象限の因

子得点を算出し、調査対象者を〈洋風街型〉、〈洋風家型〉、〈和風街型〉、〈和風家型〉の4タイプに類型化した。

これを諸属性から検討すると、世帯収入が高い者、マンション層に「洋風」比が高く、自宅外通学者には「和風」比が高いなどの傾向がみられた。地域差に注目してみると、〈東京〉が最も「洋風」に傾斜し、一方〈愛媛〉では、「和風」の割合がかなり高く、とくに〈和風家型〉が多いことが目立つ(図2)。これは、〈愛媛〉が他地域に比べて、自宅外通学者が多いこと、世帯収入が比較的低いことによるものと考えられる。また、〈大阪〉が「洋風」の中でも〈洋風家型〉が多いのは、他地域に比して世帯収入が高いことや、習いごとなどを行っている者が多いことによると推察される。

表 3. 生活スタイルの因子分析結果(因子負荷量)

項 目	I 軸	II 軸
1. 朝食は、どちらかというパン食が多い	0.20991	0.18598
2. ベッドで寝ている	0.47587	-0.05393
3. 家での食事は、テーブルにイスで食べる	0.78086	-0.07673
4. テレビを見たり、くつろぐときはソファーやイスにすわる	0.74643	0.07784
5. デパート、繁華街などへしばしば出かける	0.10967	-0.05808
6. 授業以外はとくに予定がなく、暇をもてあますことが多い	-0.00498	0.17416
7. 自分なりのファッションスタイルをもっている	0.05176	0.07537
8. 月に2、3度は、夜に友人とお酒を飲みに出かける	-0.01489	0.06589
9. 休日はハイキングなどをして自然に親しむより、繁華街で過ごすことが多い	0.00019	-0.14567
10. お茶、お花、料理などの習いごとをしている	-0.05898	0.24069
11. 家の中では、趣味の料理や手芸をよくする	0.06447	0.76586
12. 家では、家事の手伝いをよくしている	-0.06921	0.78660
13. 新発売の商品(化粧品・シャンプー等)を買ってみることが多い	0.01477	0.10632
14. 買物はデザインよりも「便利で長持ち」を重視して選ぶ	-0.04514	0.05803
15. 休日は外出するよりも、家でゆっくりと過ごすことが多い	-0.01878	0.16929
16. 服や持ち物は、ブランド名にこだわる	0.06969	-0.05845
	説明率	
	12.4	9.4

6, 14については、「はい」を-1点、「いいえ」を1点とする。I軸は洋風の生活スタイル、II軸は家庭的な生活行動を示している(下線は、因子負荷量0.4以上)。

若年層の住宅像に関する研究

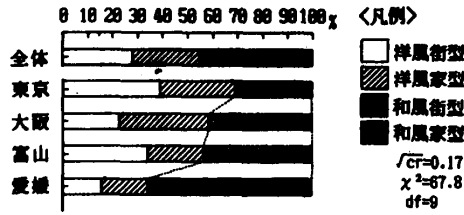


図 2. 地域と生活スタイルの類型

2) 生活意識

現代の20歳代の若者は、新人類ともよばれるように、それまでの世代の価値観とは異なる新しい生活感覚を身につけているといわれる。しかし、その一方で、統計数理研究所の第VI次国民性調査によると、若い世代の生活価値観に伝統回帰の方向が大きく現れている⁷⁾。こういった若年層の生活意識を把握・類型化するために、「保守的」「現代的」「現実的」「感覚的(新人類的)」の二つの対になる概念を用い、表4に示した4カテゴリーに関する12の基本的な生活価値観について、「はい(1点)」「いいえ(-1点)」の二者択一で回答してもらった。「伝統的な年中行事は大切にしたい」、「資格を身につけたい」、「臨時の収入が入ったら貯金したい」など、伝統を重視する意見や現実的な考え方については、地域にかかわらず肯定率が非常に高くなっている。

この「保守的」「現代的」「現実的」「感覚的(新人類的)」の2軸を組み合わせて、4カテゴリーの得点から、調査対象者を「保守的現実型」、「保守的感覚型」、「現代的現実型」、「現代的感覚型」に類型化し、カテゴリー間の得点に差がない者を「平均型」とした。価値観が曖昧な「平均型」が一定数あるものの、「保守的現実型」が最多数を占める。地域別にみると、「東京」は他地域に比して現代的意識が強く、「大阪」は保守的意識がやや強くみられる(図3)。「東京」が一般に、日常生活で情報や流行の先端に接触する機会が高いこと、「大阪」が最も収入が高く上層家庭の子女が多いことが、こういった意識の差異に関与していると推察される。さらに、「保守的現実型」は、農家居住経験者(「富山」、「愛媛」に多い)に多く、また、核家族の場合よりも世代家族や複合家族に多い傾向がみられた。このように、「保守的」「現代的」「現実的」「感覚的」という視点からとらえた場合、若年層全体としては、保守的かつ現実的な意識を多分に持ち合わせていること、居住歴、家庭環境などが

⁷⁾ 新人類の定義については、現代用語辞典¹¹⁾などに述べられているが、ここでは、物ごとを深く考えない、カタカナ職業のかつこよさに憧れるなど、俗にいう「軽さ」をもつものとした。

表 4. 生活意識について

項 目	肯定率(%)
<保守的>	
1. 昔からの伝統や、正月・節句などの年中行事は大切にしたい	89.0
2. 男性が外で働き、女性は家を守るのが望ましい家庭の姿だと思う	43.7
3. 住むなら核家族よりも、複合家族(お年寄りなどといっしょがよい)	35.0
<現代的>	
4. 他人の目や世間体は、気にしなくてもよいと思う	42.7
5. 家事は、男性も女性と平等にすべきだと思う	48.2
6. 安定した平凡な暮らしよりも、変化のある生活がしたい	35.1
<現実的>	
7. 将来に備えて、学生の間には何か資格を身につけたい	95.5
8. 臨時の収入がはいったら、すぐ使ってしまうが貯金したい	78.8
9. 自宅がある地域で、これからもずっと生活していきたい	56.1
<感覚的>	
10. ものごとは深く考えずに、ほどほどにやっていきたい	62.3
11. やりがいや責任のある仕事より、気楽な仕事につきたい	26.3
12. デザイナー、スタイリストなどのカタカナ職業にあこがれる	26.8

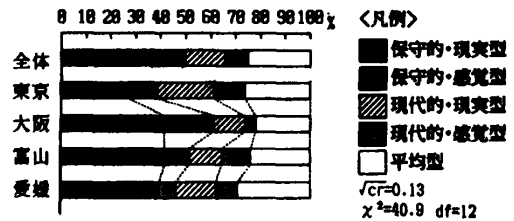


図 3. 地域と生活意識の類型

相まって、その生活観に地域差が存在していることがうかがえる。

3) 日本人意識の傾向

はじめに述べたように、社会意識としての視点から住宅像を描出するにあたって、この社会意識の基底に存在する民族の慣習やアイデンティティ¹²⁾が、今後の住宅像の方向にどう関与するかを検討することが、一つの重要な視点であると考えられる。仮に、日本人の多くが潜在的にもっているといわれる戸建持家像に、普遍性がある

表 5. 日本人意識の項目と得点

項	目	若年層	主婦層
I <縮み志向>	1. ひとりのときは狭い部屋にいるほうが落ち着く	0.73点	-1.50点
II <浄・不浄観>	2. 玄関には、日常のはきものをたくさん並べておきたくない	0.84	1.72
	3. 板の間やフローリングの床で寝そべることに抵抗を感じる		
	4. 自分の使う茶碗やはしは、決まっているのが好ましい		
	5. 家の塀の外や周辺は少々汚れていてもそれほど気にならない		
III <ウチ・ソト意識>	6. 住宅のまわりは、低い植え込みにするより、高い塀でしっかりと囲うほうがよい		
	7. 友人や知人でも、普段のままの家の中を見られたくない		
	8. 近くの友人や知人より遠くの親類のほうがいざというとき、頼りになると思う		
	9. すぐ近くの店に行くときでも身なりを整えて行きたいと思う		
IV <自然観>	10. 通りに面した窓は、常にカーテン類を閉めておきたい	1.46	1.69
	11. カーテンや座布団カバーは季節ごとに取り替えるのがよい		
	12. 庭の植木は、手を加えずに自然のまま育てるより、刈り込みをしたほうがよい		
V <共有意識>	13. 好きな小説などは、友人や図書館などから借りるより、自分で買って読みたい	1.14	1.31

上記について、「そう思う(2点)」、「ややそう思う(1点)」、「あまりそう思わない(-1点)」、「そう思わない(-2点)」の4段階。数値は、I~Vについての1項目あたり平均得点を示す。

なら、その背後に日本人の国民性や日本人の意識のかかわりが予想される。そこで、日本人の国民性と住宅像との関係を探る住文化的アプローチの試みとして、とくに日本人の土地所有観や戸建志向の背景に、各学問分野の日本人論で述べられている日本人のアイデンティティが潜在しているのではないかと、この仮説をたてた。前述の日本人論⁴⁾における、日本人のアイデンティティに関する概念を類型化し、そのなかで住生活や住宅所有観にかかわりがあると考えられる、「浄・不浄観」、「ウチ・ソト意識」、「自然観」、「共有意識」、「縮み志向」の5項目を、日本人意識のものさしとしてとりあげた。ここでは、住宅像との関連性から、女子大生にも、日本人のアイデンティティがどの程度みられるかに注目する。

表5に示す、5項目に関連した住まい方や日常生活に関する意見(13問)について、4段階の評定をしてもらい、得点が高いほど日本人意識が高いとした。13問全部についての平均点は8.8点で、同内容で調査³⁾した主婦層の平均点(5.4点)に比べて高くなっている。さらに、主婦層に比して項目間の得点のばらつきが小さく、5項目すべての得点がプラスを示すことから、新人類とよばれる世代の若者も、日本人の意識を多分にもっている

⁴⁾ 住宅像に関連した日本人のアイデンティティのものさしを抽出するにあたって、文献13)~20)の日本人論を参考にした。

と考えられる。また、保守的意識型が、現代的意識型に比して、日本人意識の総合得点が高いことに加え、現代的意識型の多い(東京)は、他の3地域に比べて得点が相対的に低い傾向があることから(図4)、若年層にみられる保守的、現実的な生活観の背後に、日本人のアイデンティティのかかわりが推察される。

4) 結婚・職業観

若年層の将来の住宅選択に影響を与える可能性をもつものとして、結婚に対する考え方と、女性が職業をもつことについての意見を尋ねた。表6に示すように、家庭中心のマイホーム的な結婚生活志向が多数を占める一方で、「子育て後に再就職」や「職業をもち続ける」など、職業意識はかなり強いことが現れている。

結婚観と職業観を組み合わせ、生活意識との関連をみると、保守的意識型に家庭中心の結婚生活観がもっと強く、現代的意識型は夫婦や自分の生活を重視し、再就

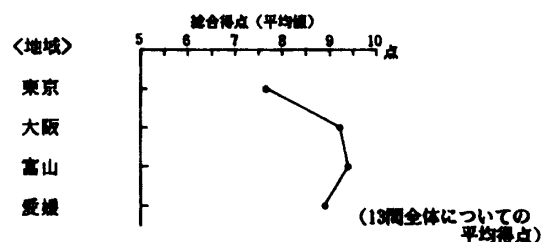


図 4. 地域と日本人意識の得点

若年層の住宅像に関する研究

表 6. 結婚と職業についての考え方

類型	項目	%
結婚観		
〈家庭中心〉	家庭をもち子供を育て、家庭中心に暮らす	61.8
〈夫婦中心〉	家庭をもっても子供をもたず、夫婦で自由に暮らす	3.5
	家庭をもっても子供に縛られずに、自分や夫婦の生活中心に暮らす	29.4
〈独身〉	家庭をもたず、ひとりで暮らしている	4.7
	家庭をもたず、気の合った友人等と暮らす	0.6
職業観		
〈専業主婦〉	女性は職業をもたなくてよい	2.4
	結婚するまでは職業をもつほうがよい	14.2
	子供ができるまでは職業をもつほうがよい	10.9
〈再就職〉	子供ができたら一度やめて、また職業をもつほうがよい	43.2
〈職業継続〉	職業はずっともち続けるほうがよい	29.2

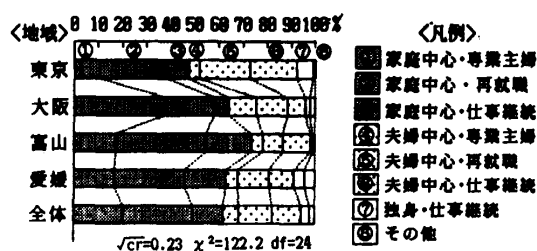


図 5. 地域と結婚・職業観

職や職業継続の考え方も強いなど、生活意識が結婚・職業観に反映していることがうかがえた。地域別にみると、〈大阪〉が他地域に比して「家庭中心・専業主婦」が多い傾向があるが、これは、〈大阪〉が最も世帯収入が高く、上層家庭の子女が多いこと、他地域に比して保守的意識が強いこと、によるものと考えられる(図5)。

以上の4側面から若年層(女子大生)の生活像を考察すると、①一般に新しい生活感覚をもつといわれる若者が、全体としてみると、かなり保守的、現実的な生活観や、マイホーム的な結婚観をもち合わせていること、②主婦層と比較して、日本人のアイデンティティに関する意識も強いこと、③生活観と生活スタイルに、居住経験や家庭環境を背景とする地域差がみられることが特徴といえる。しかし、こういった生活像の背後には、上層家庭の出身者が多いという家庭環境が、一定関与しているとみられる。

4. 住宅像の輪郭

これまでみてきた若者の生活像を背景にして、住宅の所有形態や建て方に関する考え方と、結婚時の住宅選好について検討し、若年層全体としての住宅像の輪郭を把握することを試みる。

(1) 所有形態・建て方などに関する住宅像

若年層の潜在的な住宅の理想像を抽出するために、「持家-借家」、「戸建-集合住宅」、「和風-洋風」、「定住-住みかえ」、「都心-郊外」などを軸にして設定した24項目の意見を提示し、「はい(1点)」、「いいえ(-1点)」の二者択一で回答してもらった。全体に、持家や戸建を評価する意見が上位を占め、上下足非分離、バス・トイレがいっしょなど、新しい生活様式に関する意見の肯定率はきわめて低くなっている(図6)。

この24項目の設問を用い、所有形態、建て方、立地、造り、和洋の様式という観点から、住宅像の類型化を試みる。まず、住宅の造りについては、「家を建てるなら、鉄筋コンクリート造より木造にしたい」を肯定する者を〈木造り志向〉、否定する者を〈非木造り志向〉と設定した。前者は約6割、後者は4割である。

つぎに、所有形態・建て方・立地などについては、これらに関する14項目(1~9, 12~15, 23)を用いて因子分析を行い、抽出された軸を使って類型化を行った。表7に示す、「立地(都心-郊外)」、「住みかえ」、「持家」、「接地性」を表すと解釈できる4軸のうち、説明率が高いⅠ軸とⅡ軸を直交座標にして14項目をプロットすると、「戸建・持家・郊外・定住」にかかわる7項目のグループ(A)と、「集合住宅・借家・都心・住みかえ」にかかわる7項目のグループ(B)に分類できる(図7)。

このA, B両項目群の総合得点によって、対象者を①〈戸建持家志向〉、②〈集合住宅住みかえ志向〉、③得点差がない〈複合志向〉に類型化し、①についてはさらに、「木造り-非木造り」の軸を加味して、〈木造り・戸建持家志向〉、〈非木造り・戸建持家志向〉に分類した。

和洋の様式については、「一戸建を建てるなら、純和風の家にしたい」、「庭は、築山、池、松ノ木に代表される和風がよい」、「座敷には、床の間が必ずいると思う」、「和室は1室あればよい」の4項目の回答からとらえた。前3問については、「はい」を1点、「いいえ」を-1点、「和室は1室あればよい」については、得点を逆にして換算し、4項目の合計点がプラスの場合を〈和風志向〉、それ以外を〈洋風志向〉とする。〈和風志向〉が全体の約1/4、〈洋風志向〉が3/4で、観念的には洋風の住宅イメージが強いと考えられる。

表 7. 所有形態・建て方等に関する項目の因子分析結果 (因子負荷量)

	I 軸 <立地>	II 軸 <住みかえ>	III 軸 <持家>	IV 軸 <接地性>
1. 庭付きの家なら借家でよい	0.00819	0.20331	-0.60786	0.15418
2. 将来は絶対にマイホーム	0.14626	-0.60475	0.72048	0.19265
3. 家賃を払うのはばからしい	-0.00562	0.04093	0.65371	-0.05202
4. 借家より持家がリッチだ	-0.12800	-0.16091	0.50821	0.16074
5. いろいろな所にすみたい	-0.13842	0.62085	-0.34864	-0.09165
6. 住まいには庭がかかせない	0.19275	-0.06562	0.07311	0.84641
7. 不便な戸建よりマンション	-0.60032	0.37253	0.05985	-0.26598
8. 狭くても一戸建に住みたい	0.53217	-0.29180	0.11955	0.22709
9. ベランダがあれば庭なし	-0.26980	-0.06887	-0.03395	-0.78734
12. 生活にあわせて住みかえ	-0.19076	0.71959	-0.06370	0.09902
13. 同じ地域に住み続ける	0.19393	-0.63168	0.17884	0.02897
14. 田舎より大都会に住みたい	-0.73339	0.11835	0.06943	-0.03218
15. 市街地より郊外に住みたい	0.69515	0.10710	0.12287	0.05391
23. 住まいより趣味・レジャー	0.20016	0.54837	0.05395	-0.19514
説明率(%)	22.6	12.5	8.3	7.1

□ 因子負荷量 0.5 以上, ▨ -0.5 以下

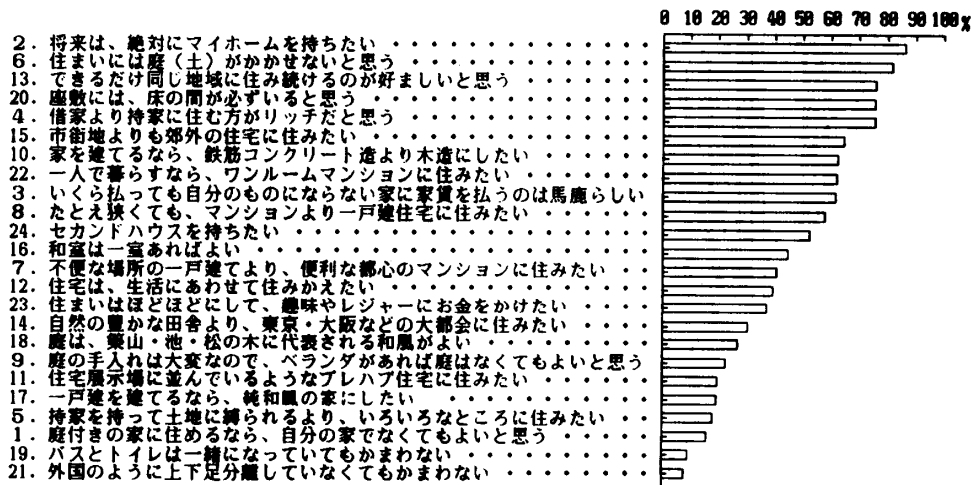


図 6. 住宅についての考え方 (単純集計)

図 8 は、上記の方法によって類型化した所有形態・建て方に関する住宅像と、住宅の造り、和洋の様式に関する志向とを重ねて表したものである。これによると、若年層の約 8 割が「戸建持家志向」をもっていること、そのうち過半数が「木造り・洋風」志向を示し、「非木造り・洋風」と合わせると、洋風の戸建持家像が支配的であると把握できる。また、単純集計によると、「住まいには庭がかかせない」という意見を 8 割もの多数が支持していることから、全体としてとらえると、洋風の庭つき戸建持家像が、若年層にほぼ共通する住宅の理想像と

考えられる。以下では、結婚時の新居のイメージや外観選好から、若年層の住宅像をより明確にとらえていく。

(2) 将来の住宅選好—結婚時の新居—

若年層の住宅像をより具体的にするために、将来の結婚時の新居という設定で、居住地域、住宅の立地、住宅タイプについての希望を尋ねた。居住地域については、「自宅がある都府県内」43%と「地元に近い都府県内」29%の両者を合わせて、全体の 7 割以上が結婚後も地元都府県近郊に居住希望をもっており、地元定着志向が強いといえる。住宅タイプでは、過半数が「洋風戸建住

若年層の住宅像に関する研究

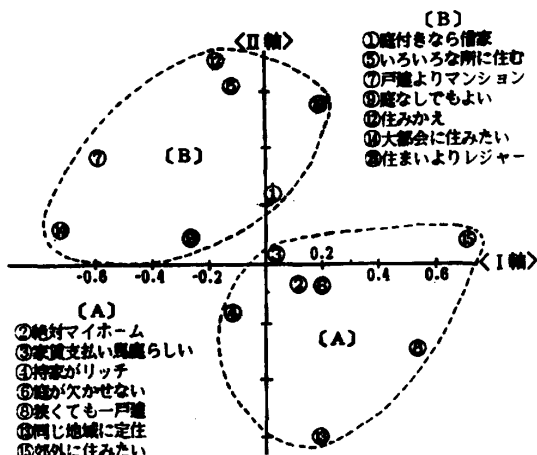


図 7. 所有形態・建て方に関する項目の因子分析
— 因子のプロット —

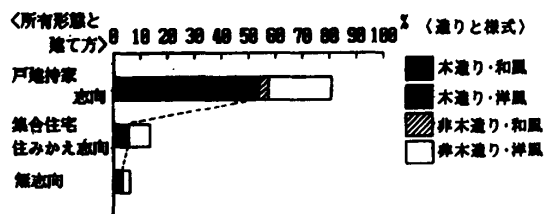


図 8. 住宅像の輪郭



図 9. 結婚時の新居について (住宅タイプ)

宅」を選択し、「アパート・マンション」は合わせて2割足らずである(図9)。住宅の立地については、市街地、郊外、ニュータウンなどを、調査対象者がイメージしにくかった点を考慮する必要があるが、「市街地の住宅地」が4割、ついで「郊外のニュータウン」が3割弱となっている。これらを総合すると、若年層全体としてみた場合、地元近郊で、市街地の住宅地あるいは郊外のニュータウンに建つ洋風の戸建住宅が、結婚時の住まいのイメージとして浮かび上がってくる。

これまでみてきたように、若年層の住宅に対する曖昧な意識の中に、全体としては、庭付きの洋風戸建住宅を理想とする住宅像が深く潜在しているといえる。そして、この住宅に対する潜在的なイメージが、結婚時の新居として選択肢を具体的に提示した場合、「洋風戸建住宅」

の選択と矛盾することなく結びついている。新しい生活感覚をもつといわれる若年層が、都心のアパートやマンションではなく、庭付き戸建持家を、同じ持家層の主婦層よりもいっそう強く抱いていることが注目される。

さらに、在来木造住宅、RC造住宅、各種プレハブ住宅など、デザインの異なる24種の戸建住宅の外観写真を提示して選好を尋ねた結果、全体に在来木造やRC住宅の評価は低く、比較的シンプルで和洋折衷的な外観群と、サイディング目地やタイル張り、飾り窓など、装飾的な洋風外観群の評価が高いことから、外観選好がこの2方向へ収束していく可能性がうかがえた。若年層の多くが抱いている戸建持家像は、観念的なイメージとしてだけでなく、視覚的な外観選好の点からも、洋風のイメージを強くおびていると推察される。

5. 住宅像の構造

前節で把握された若年層の住宅像が、どのような客観的、主観的要因に規定されているかを、若年層の多くに潜在すると考えられる戸建持家像に注目して検討する。

(1) 住宅像の地域差

各地域の住宅の地方色、あるいは都市化の相違が、若年層の住宅像においても、地域差として現れるのではないかとこの視点から検討する。

所有形態・建て方・造りに関する住宅像をみると、〈東京〉では、〈木造り・戸建持家志向〉が1/3程度しか認められず、かわって〈集合住宅住みかえ志向〉が強いことが特徴的であり、他の3地域とはやや異なる傾向を示すことが注目される(図10-①)。また、結婚時の住宅選好では、〈東京〉は「アパート・マンション」の選好が他の地域に比して高く、〈愛媛〉では「和風戸建住宅」の選好が高いなどの傾向がみられた。こういった傾向は、〈東京〉が他地域に比してマンション層や借家層がやや多いこと、〈愛媛〉は最も農家出身者が多く、生活スタイルに「和風」の起居様式の割合が高いこと、などが関連していると考えられる。

一方、積雪地の〈富山〉と温暖地の〈愛媛〉の間には、大きな差異がみられなかった。これは、住宅の所有関係や建て方、立地という点においては、地方色よりも都市化の相違が住宅像に影響するためではないかと考えられる。また、調査対象者が必ずしも地方色をもった住宅に住んでいるわけではないことも影響していると考えられる。

(2) 住宅階層・居住歴と住宅像

今回の調査対象者の大部分は、戸建持家層の出身である。この戸建持家層に、マンション層や借家層よりも持

家志向がいっそう強く認められることから、戸建持家に生まれ育った経験が、戸建持家像の背後に関連していると考えられる。一方、量的には少ないが、マンション層では、〈集合住宅住みかえ志向〉もかなり強く、住宅のイメージにやや分裂傾向がうかがえる(図10-②)。居住経験別にみると、〈木造り・戸建持家志向〉が農家居住経験者に非常に強く、戸建持家に居住経験のない者に少ないことが注目される(図10-③)。

また、マンション層とマンション居住経験者は、〈洋風志向〉が強く、結婚時の新居も「アパート・マンション」の選好度が高い傾向がある。これらの点から、どんな住宅で育ったかということ、とりわけ戸建持家に居住した経験の有無が、若年層の住宅像を規定する大きな要因の一つになっていると考えられる。

(3) 生活意識・日本人意識と住宅像

住宅像を規定する主観的要因として、まず、生活意識との関連をみてみると、若年層全体の4割強を占める〈保守的現実型〉に〈戸建持家志向〉が非常に強く、とくに〈木造り・戸建持家志向〉が7割近くに達している。一方、〈現代的感覚型〉は〈集合住宅住みかえ志向〉が強く、戸建持家像とほぼ二分している(図10-⑤)。また、〈和風家型〉の生活スタイルも、〈木造り・戸建持家志向〉を推進する傾向がある(図10-④)。こういった傾向は、若年層の生活観が住宅像に関与していること、とりわけ若年層の多くに内在する保守的、現実的な生活観が、戸建持家像を推進していることを示唆するものと考えられる。また、家庭中心のマイホーム的な結婚観をもつ者に〈戸建持家志向〉が、独身あるいは夫婦中心で仕事を継続する志向をもつ者には〈集合住宅住みかえ志向〉が比較的強いなど、将来の結婚・職業に対する考え方が住宅の理想像に、ある程度関与していることもうかがえる(図10-⑥)。さらに、図11に示すように、〈戸建持家志向〉をもつ者が、〈集合住宅住みかえ志向〉に比して日本人意識の得点が高いことは、若年層の多くにみられる戸建持家像の背後に、日本人のアイデンティティが潜在している可能性を示唆するものと考えられる。

以上の点から、若年層の住宅像の規定要因を考察すると、客観的には、調査対象者の大部分が持家に生まれ育ったという居住歴が大きく関与していると考えられる。加えて、若年層の多くが抱く戸建持家像は、保守的・現実的な生活観やマイホーム的な結婚観によって、いっそう推進されることから、新人類とよばれる若年層の意識に内在する保守的な側面が、日本人のアイデンティティと相まって、この戸建持家像を支えていると推察される。

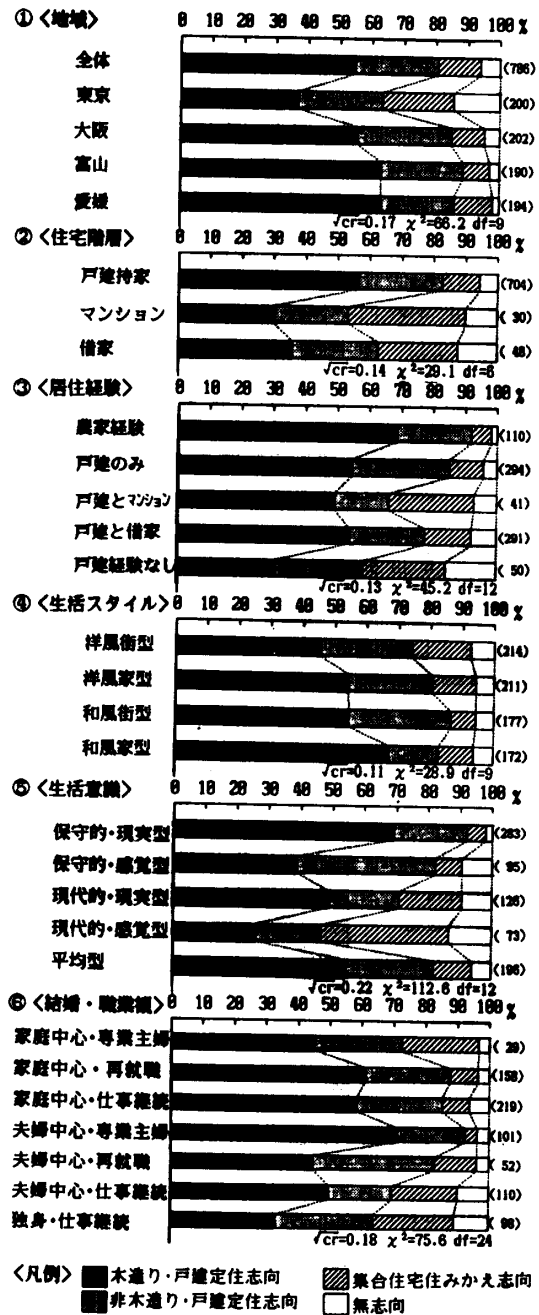


図 10. 住宅像の構造

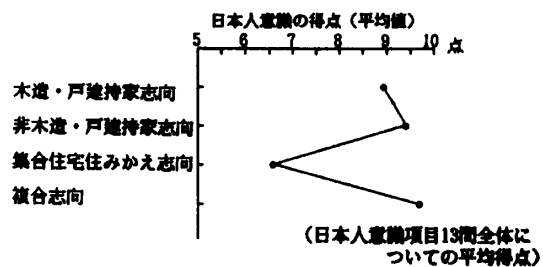


図 11. 住宅像の類型と日本人意識

若年層の住宅像に関する研究

6. 要 約

本稿において、若年層の中でもとくに女子大生の住宅像を把握・検討した結果、つぎのような知見が得られた。

(1) 全体の約8割に〈戸建持家志向〉がみられ、「住宅には庭がかかせない」を8割が支持することから、持家層出身者が大部分を占めることを考慮する必要があるが、「庭付き戸建持家」が女子大生にはほぼ共通する住宅像であると考えられる。また、その戸建持家像は、観念的にも、視覚的な外観選好の点からみても、洋風のイメージが強いことが特徴である。

(2) 主婦層を対象とした予備調査結果とあわせて世代差を比較すると、女子大生の住宅に対する曖昧なイメージのなかに、戸建持家を理想とする住宅像が、同じ持家層の主婦層よりも深く浸透していることから、戸建持家像は若年層において再生産されていると考えられる。

(3) 女子大生の戸建持家像の背景には、客観的には、戸建持家に生まれ育った居住歴が関与しているとみられるが、主観的には、女子大生の意識に内在する保守的な生活観、さらに日本人のアイデンティティが介在していると推察される。

(4) 住宅像の地域差は、〈東京〉が〈集合住宅住みかえ志向〉が強いなど、他の3地域と異なる傾向を示す点に顕著に現れている。〈東京〉での都市的生活様式や、他地域よりも情報や流行の先端に接触しやすいことなどが、住宅像の違いを生む一因になっていると考えられる。

これまでみてきたように、比較的上層家庭の持家層出身者が多いという前提のもとで、女子大生の住宅に対するイメージのなかに、洋風・庭付き戸建持家像は支配的な位置を占めているといえる。こういった女子大生の住宅像の背景を解明するうえで、居住経験や、ライフスタイルが重要な手がかりになると考えられるが、これらがどの程度住宅像を規定するかについては、なお検討すべき課題である。さらに、若年層全体としての住宅像をとらえるためには、今後、より幅広い層を対象として検討する必要があると考えられる。

今回の調査から、持家層出身が多いという前提のもとで、新人類とよばれ、多様な生活感覚をもつといわれる女子大生が、住宅については、一般的ともいえる「庭付き戸建持家」の理想像を、同じ戸建持家層の主婦層よりも強く描いていることが明らかになった。こういった女子大生の住宅像は、曖昧なものではあるが、若年層全体としての住宅像、さらには、これからの住宅の方向を示唆する一つの伏線と考えられる。

最後に、本研究に関し、愛媛大学曲田清惟助教授、昭和女子大学竹田喜美子助教授、大阪樟蔭女子大学一棟宏子助教授、ならびに4大学の学生、大阪市立大学住田ゼミ卒業生のご協力をいただいた。ここに感謝の意を表す。

なお、本研究の一部は、昭和63年度日本家政学会関西支部、同年日本建築学会近畿支部²¹⁾にて発表した。

引用文献

- 1) 住田昌二: あすの三重, 66, 15 (1987)
- 2) 塩田丸男: 住まいの戦後史, サイマル出版会, 東京, 63~84, 213~265 (1975)
- 3) 内閣総理大臣官房広報室: 大都市地域の住宅・宅地に関する世論調査 (1980)
- 4) 内閣総理大臣官房広報室: 大都市地域における住宅・地価に関する世論調査 (1982)
- 5) 碓田智子, 住田昌二: 日本建築学会学術講演梗概集 F, 431 (1988)
- 6) 総務庁青少年対策本部: 現代青年の生活と価値観, 大蔵省印刷局, 5~9 (1987)
- 7) 統計数理研究所国民性調査委員会: 第4日本人の国民性, 至誠堂, 東京, 17~19 (1980)
- 8) 碓田智子, 住田昌二: 日本建築学会近畿支部研究報告集, 28, 457 (1988)
- 9) 内閣総理大臣官房広報室編: 世論調査年鑑 (1975~1986)
- 10) 三宅一郎, 山本嘉一郎: 新版 SPSSx I 基礎編, 東洋経済新報社, 東京 (1986)
- 11) 自由国民社編: 現代用語の基礎知識, 自由国民社, 東京, 1097 (1988)
- 12) 見田宗介: 現代社会の社会意識, 弘文堂, 東京, 101~105, 114 (1979)
- 13) 大貫美恵子: 日本人の病気観, 岩波書店, 東京, 1~75 (1985)
- 14) 中根千枝: タテ社会の人間関係, 講談社現代新書, 講談社, 東京, 29~53 (1967)
- 15) 中根千枝: 家族を中心とした人間関係, 講談社学術文庫, 講談社, 東京, 144~166 (1977)
- 16) 李 御寧: 『縮み』志向の日本人, 講談社文庫, 講談社, 東京, 126~190, 315~321 (1984)
- 17) オギュスタン・ペルグ: 空間の日本文化, 筑摩書房, 東京, 185~225 (1985)
- 18) 南 博: 日本人論の系譜, 講談社現代新書, 講談社, 東京, 39~187 (1980)
- 19) 会田雄次: 日本人の意識構造, 講談社現代新書, 講談社, 東京, 30~36 (1972)
- 20) 南 博: 日本の自我, 岩波新書, 岩波書店, 東京, 153~154, 189~193 (1983)
- 21) 碓田智子, 住田昌二: 日本建築学会近畿支部研究報告集, 28, 461 (1988)